

教育委員会職

昭和54年 6月号 (No.346)

○都道府県・指定都市教育委員会委員長

・教育長会議文部大臣説示

○省エネルギー時代と教育

○内申書裁判における条理について

6



文部省初等中等教育局地方課

もくじ (昭和五十四年六月号)

法令用語 (210) 「除 斥」

都道府県・指定都市教育委員会
委員長・教育長会議文部大臣説示 (4)

省エネルギー時代と教育 天谷 直弘 (12)

内申書裁判における
条理について 勝部 真長 (21)

*教員海外派遣レポート*10 モロッコ

モロッコの教育 定宗 一宏 (44)

随 想

当たり前のこと 森脇 英一 (42)

元号——その文化史的意義 所 功 (29)

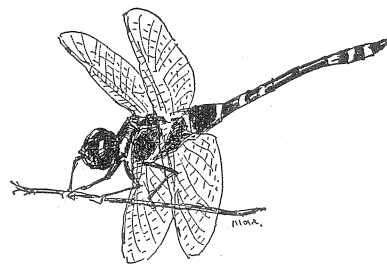
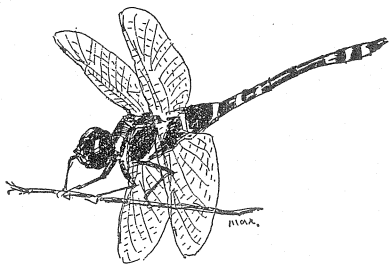
元号法について 地方課 (37)

教育委員会委員のいわゆる
準公選条例について 地方課 (54)

△資料▽

国家公務員の週休二日制の
再試行結果について (67)

新教育長紹介 (77)



文化活動圏について

—文化と地域社会づくり—

建築家

中央教育審議会委員

黒川 紀章

一 文化活動圏とは

今回の中教審答申「地域社会と文化について」では「文化活動圏」という考え方が一つの目玉となつていますが、その考え方がわかりにくいという声も聞きました。私は中教審の委員で、地域社会と文化に関する小委員会の委員でもありましたので、この「文化活動圏」についていろいろお話ししてみたいと思います。

二つの流れ

まず、文化活動圏とは何か、を述べる前に、そういう概念が出てきた背景や経緯のようなことについてお話ししましょう。

ご存じのように地域社会の時代とか、地方の時代とか言われるようになって、地方都市の文化を育てるということに対する一種の盛り上がりのようなものがいま日本中にあると思います。それは基本的には世界的な流れの

ように思われます。なぜかという、今までどちらかというと部分よりは全体を、あるいは地域よりは国家をという志向が強かったし、人間個人よりは組織をという発想が強い時代が続いてきた。それが次第に個人の自覚が言われるようになってきたのが、近代化の過程なのだと思います。

ところが、相変わらず日本では中央集権制度が強く存在している。どちらかというと一九六〇年代は全体の効率、生産性を上げるためにより組織化の方向が強かったのです。制度を全国的に整備するとか全国的に情報ネットワークを整備するとか、ビックビジネスというような効率のいい組織をつくっていった。これは経済発展に非常に効果があったし、それなりの役割を六〇年代に果たしたと思います。

それ以降、我々の専門分野である都市計画の分野でも、あるいは芸術の分野でも、次第にそういう全体に対する部分というものの見方をもう少し細かにしていくべきではないか、美学の問題で言えば、統一された全体的な美学よりも、むしろ一見無秩序に見えても個々の

がニューヨークで取り上げられたのです。

それからもう一つの流れというのは、大都市圏への人口や生産力の集中が余りにも急速に進み過ぎたために、人間がある種の自然に対する願望を強めていったことです。このような反作用が自然豊かな地方に対するあこがれというものを作り上げていったのだろーうと思います。これは日本だけではなくて、やはりヨーロッパでもアメリカでも、自然の見直しや保存、あるいは環境の中により緑をとり入れるというような実験が行われています。しかし、日本ほど急激に一九六〇年代に大都市へ人口が集中したところもありないわけで、それだけ一層日本において自然や地方への関心が強まったのだろーうと思います。

新しいコミュニティの構想

文化活動圏について

このように国家よりも地域という部分を非常に重要視していかなければならない、あるいは地方は自然が豊かで望ましい、ということになると、次は一体地方での生活とはどういうものなのだろうかと、そこに焦点が合っ

きめ細かな個性というものの表現を重視する美意識というものが重要視されなければならない、という主張がふえてきました。

ですから、都市計画においても、例えば広場を中心にして道路を放射状につくるとか、建物の高さを全部そろえるというような都市の美しさよりは、ある地域の中でそれぞれの建物が個性を競い合っているけれどもそれが放任主義にはなっていない、個々の個性は十分表現しているけれども街並みとしてはある秩序がある、というような新しい街並みの美しさというものを考えたらどうか。そういう動きが出てきています。

具体的な例で言えば、二年ほど前にニューヨークの近代美術館で「新宿展」という展覧会がありまして、その展覧会で扱った地域というのは歌舞伎町の下町でした。そういう下町には一種のバイタリティーがある。あるいは無秩序に見えてもそこには余り犯罪もない、世界の都市の中では比較的治安が維持されている。人種差別もない、そして非常にドラマチックな二十四時間がそこに存在しているじゃないか、ということから新宿の歌舞伎町

てくるわけです。それから、三全総が定住圏構想というものを柱にしているのは当然のことだと思ふのです。新しい人口が地方圏で二十五年間で一千万人もふえるというように想定されているのですから、今ある地方の姿をただそのまま保存するという構想ではあり得ず、そこには将来への変化を踏まえた新しい地域社会づくりのイメージがなければならぬのです。具体的なコミュニティの構想がないと地方が豊かになるかどうかはつきりしないではないか、ということになるわけです。

そこで、さてコミュニティとは、という根本的なところに現在また議論が帰ってきているところなのです。コミュニティの議論というのは古くからあるのですが、私は時代時代に応じてコミュニティが成立する条件がかなり違うと思います。新幹線その他の鉄道や自動車などの交通機関があり、テレビ、ラジオがあって非常に活発に情報交換がどの地域でも行われている、あるいはどこへでも簡単に移動できる、そういう時代のコミュニティとは何か、というところをえなければならぬわけですね。

三全総では定住圏構想という一つのまとめた言葉を使っていますが、その中身を読むと、広域生活圏とか、通勤通学圏とか、流域生活圏という言葉が出てきます。既に三全総では、一つの生活圏の中でも、それぞれのものの見方によってコミュニティの範囲が色々異なるという考え方が出てきているのです。

例えば、流域生活圏は、水は大事だということですが水資源に着目し、水資源のキャパシティ、流域というものを考えてコミュニティを考えていこうという圏域構想です。これは全く新しい発想だと思ふのです。

それから通勤通学圏。交通機関の発達で今では小学校は別としても中学とか高校とかは電車を通っている人達が多い。さらにそれが通勤ということになると、相当な距離を一時間とか一時間半とか時間をかけて職場まで通ってきます。そうすると、さてどこまでをコミュニティの範囲と考えるかというのが大変むずかしくなってきたわけです。従来は自分の家の向こう三軒両隣の区域、近隣住区と言いますが、そういう「住む区域」というものがコミュニティの範囲であって、つまり「そこ

近隣住区的な従来の閉鎖的なコミュニティの構想も結構です。しかしどうも足りないものがある、と言いたいのです。マーケットリサーチをするとき商圏という言葉を使いますが、商業というものが成り立つ一つの圏域という考え方も従来からありました。

しかし、肝心の、生活の中で最も重要な文化、それも広い意味での文化という視点がありませんでした。私が文化活動圏という言葉を使ったときの文化というのは、芸術文化という狭い意味ではなくて、スポーツとか社会教育とか学校教育とかも含めています。オペラや歌舞伎を見に行くとか、スポーツ大会に参加するとか、そういう生活の中で繰り広げられている教育、文化、スポーツを含めた広い意味での文化のための活動の範囲というのが、通常行政圏を越えてあるのです。

例えば、二〜三万の都市に劇場をつくるのはむずかしいと思います。それは経営的には成り立ちにくい。国の立場としても、大型の博物館を一万や二万の都市にそれぞれつくっていくというわけにはいかないでしょう。そうするとある広い文化的な活動圏というものを想定し

に住んでいる」ということがコミュニティの原則でした。ところが通勤通学圏というのは、そこに住んでいるということと関係なく、職場まで含めて一つの生活行動圏というものを考えてみよう、ということなのです。

このように、コミュニティがそれぞれのものの見方によって広がり、形が全部違う時代に入ってきました。それが重なり合っている人間の生活というものの実態を把握していかなければなりません。それを単に何々町とか、何々市とか、何々学区というようなことだけでとらえていくと、そこで実態的に行われている生活の行動圏というものとはぐわな問題しか出てこないという危険性があると思います。ですから、三全総のそういう非常に多重的に地域というものをとらえていこうという考え方は、私は大賛成なのです。

文化活動という視点の導入

ですから、そういう考え方を延長して、通勤通学という発想があるのは結構だし、水という資源から圏域を想定するのも結構です。そこに住んでいるという意味での

で、そこで成り立つような国立の施設をそこにつくっていくということが考えられます。

ですから、そういう文化活動という観点から一体それぞれの地域でどういうふうな広がりがあるかというのかということを考えていく新しい視点を出そうというのが、今度の答申で文化活動圏ということを使った意味だったのです。それぞれの地域で実際に今行われている文化活動がどのように広がっているのかを調査した上で新しい圏域を考えてみる。そしてそれを将来どのように広げ、あるいは縮めていくか、あるいはどのように個性化させていくかを考えたかどうか、というのが、文化活動圏を地域社会との関連で取り上げたきっかけなのです。

二 文化活動圏の構造

三つのリズム

このように文化活動圏というものを考えていくと、文化活動にはそれこそいろいろな種類・態様のものがあ

り、時間的な変化もあるので、文化活動圏そのものが非常に多重構造になるのではないか、どのような形でその多重性の中からまとまりを考えていくのか、という問題があります。

私は、人間の生活リズムというようなものでこれをまとめてみたかどうかという私案を持っています。それはどうということかといえますと、人間の文化活動にはある種のリズム、つまり毎日行うというリズムと、週末に行うというリズムと、月一度くらいするというリズムがあつて、この三つくらいでとらえておくとかかなり文化活動圏というのははっきりしてくるのではないか、という考えを持っているのです。それは地域ごとに広がりがあると思います。

まず、地域ごとに、そこに住んでいる住民の日常的な文化活動圏、つまり第一のリズムからとらえた文化活動圏がどのように広がっているかを調べてみます。ある地域では、日常文化活動圏ですら隣りの町にまで広がっていることもあります。隣りの町に商業施設や教育施設、例えば大学などがたまたまあつて、割合そこへ日常文化

のパターンの違いを今度は分析していくとおもしろいと思うのです。

ある地域は非常にスポーツに偏っていて、しかもウィークエンド型スポーツが多い場合、町から少し離れたところに海岸があり大規模保養施設があつて、ウィークエンドになるとその地域の人はほとんどそこに行つてスポーツをしているというようなパターンが出てくる場合があります。その町の中にスポーツ関係の施設が充実していてウィークエンドになつてもそういう動きはほとんど出てこない場合や、日常のスポーツ活動、文化活動と同じようなパターンがウィークエンドのモードに出てくるというケースもあります。

それぞれの活動、つまり学校教育、社会教育、芸術・文化、スポーツについて三つのモードを変えてみる。それをそれぞれの都市で比較したり、それをどういうふうにもつていくのがその地域でより個性的な文化活動を助成することになるのかというふうに見ていく。それが文化活動圏の見方だと私は思っています。

活動圏が広がっているという具合なのです。

それから、これからますます強くなるであろうウィークエンドのリズム、つまり週末の文化活動のリズムを取ってみると、これは日常文化活動圏とはまた違ったパターンをもちます。それまでは歩いて出かけて非常に狭い範囲で行っていたような行動が歩き以外の方法により突然ある町とすうつと関係をもつ。これも地域によって違いますが、非常に独特な活動圏ができてくるのです。

さらに月に一度か二度する文化活動だけを取り出してその地域の住民がどんな行動をしているかを調べてみます。山菜採りに行くという人たちがいるかもしれません。月に一度くらいは地方中核都市の百貨店に買物に行くという主婦がいるかもしれません。月に一度くらいはお芝居を大都市まで出て見てくるという人もいるかもしれません。

このように文化活動がその地域でどんなふうになっているかを調べて、この文化活動圏の三つのモードあるいはリズムでこれを見ていくと、それぞれの地域、それぞれの都市によって今そのパターンが違うわけです。そ

三 文化活動の場づくり

文化施設の多極的集積

それでは、この「文化活動圏」を考慮し、具体的にどういうふうな文化活動の場づくりを進めていけばいいのでしょうか。

中教審答申でも、文化施設について、例えば、日常的な文化活動圏では、住民が気軽に利用できる、多目的な機能をもつ施設を、広域的な文化活動圏では、住民の多様な文化活動にこたえて、専門分化した機能をもつ施設を整備すべきであるということが述べられています。文化活動の場の整備の基本的な考え方は、答申の中にもありましたように「多極的集積」ということです。よう。「多極集中」と言ってもいいと思います。それは、一番最初に申し上げたように、地方の時代の基本的な流れの根本にある、中央集権的な制度というものをもう少し多極集中に分散していこうという考え方です。

分散にもいろいろあり、今まで東京、大阪、名古屋と

いう大都市圏に集中していたからそれを地方に完全にばらまいてしおうという分散もあります。これをホモジニアスな分散と言っていると思います。

例えば文化施設をつくるのでも、それを二万人の都市にも、百万人の都市にも同じようにばらまきましようという考え方です。しかし、私はすべてのところに全く平等に何もかもそろえるのがいいのかということについては、いささか疑問を持っています。

そういうやり方というのは、地域の文化というものを極めてホモジニアスなものにしていく危険性があるのではないかと思います。つまり、行政的にどの地域も同じような文化施設の投資をしていくと、文化というものに対して同じような活動の基準を設定していくことになってしまふのです。

私は文化というものはそこに住んでいる人が自発的につくるものである、従ってそういう自発的な、より個人的なものを引っ張り出すための考え方をしなければいけないと思っています。ですから、長い時間をかけて文化というものがその地域社会の中で育ってくるのを刺激し

ていくというやり方で進めていかなければならないわけですから。

私は、文化を育てるといえるのは非常に時間がかかると思うのです。経済を成長させるのはかなり人為的に、短期間でできる、しかし文化を育てるのはあわててはいけないと思います。あわてないというのは、どこからそれを始めていくか、という政策面での選択をしていくということになるでしょう。

ですから、文教政策、特に文化を育てていくための公共投資ということで考えますと、まず文化施設をそれぞれ地域社会の中でより活発に利用されるようなところにむしろ集中させる方がいいと思います。

今は東京、大阪、名古屋に集中しているわけですが、それをそれぞれの地域の中核都市と言われるようなところに集中させていくということです。だから、三大都市圏から見ると分散であり、それぞれの地域から見れば集中だということで、「多極集中」あるいは「分散的集中」という言葉になるのです。

どうしてそういう考え方が必要かと言いますと、例え

空間の文化的利用

また、答申の中で、空間についての文化的側面に留意しつつ文化活動の場を整備するという考え方が出ています。これも文化活動の場づくりを考える上での重要なポイントです。

今まで、例えば教育の場というと学校と決まっています。ですから、学校に行くと神聖な教育の場だと考えるが、学校を離れた途端に子供たちも教師も非常に解放されてしまふのです。余りにも学校が中心すぎたために、社会教育的な面、家庭教育的な面とのつながりが日本では希薄です。

それと同様に、文化活動をとっても、今まで我々はボーリングをするためにボーリング場に行く、講演を聞くために講演会場に行くというように、行く場所とか目的とかがはっきりしていて、文化センターとか何々集会場とか、何々会館というふうにな名前がついたところだけで行われていたのです。

しかし、考えてみると、文化活動というものはもっと

広い空間で平生行われているはず。一番その中で大事なものは、私は街頭、言いかえると路地だと思っています。例えば、私は京都の研究をしています。秀吉以降の京都というのは、道、つまり路地の上が教育機関にもなっていたし、子供の遊び場にもなっていました。だから、子供たちは安心して路地で遊ぶことによって、町の構造がどうなっているか、そこにどういう人が住んでいるかという社会教育も自然に受けたのです。何が危険か、大人の生活とはどういうものなのか、何をしてはいけないのか、人が共同して何かをするということ、社会的連帯とはどういうことなのか、ということ、こういう公共空間の中で遊びながら学んできたわけです。

いま都市の中で、そういう広場とか公園とか道路とかいうものが文化活動の場だという認識が少ないために、例えば東京で言えば日比谷公園も宮城前のあの美しい公園も正午頃はOLに、夜はアベックに占領されていて、我々が本当に公園を散歩しようと思っても、何か肩身が狭い思いで散歩しなければなりません。

そういうふうではなく、それぞれの地域社会の中でみて、何々銀座流の、大都市を全ての面においてこじんまりさせたような都市になり、個性がなくなってしまうといます。ですから、これからの地域社会づくりは、その地域の中での伝統的な、あるいは地形的、社会的な固有の条件というものを総合して、その地域特有の文化を育てるということが基本にならないといけないと思います。

だから、もちろん経済も大事だし、その地域社会の様々な政治的な問題もあると思いますが、そういうことを全てを含めて一番何が柱かという、その地域がどういう文化を育てるか、ということになると思います。しかもその文化を育てるということは人材を育てるということです。その地域社会の中で素晴らしい人材を育て、素晴らしい文化を築き上げていくということがその地域の誇りになります。それは必ず隣りの町とか市とかとは一味違った地域社会を育てる一つのきっかけになると思います。

そういう意味で、従来経済的な発展ということに重点が置かれていたのを、地域社会づくりの柱は文教政策で

んなが公園へ行ってやあやあとお互いに声にかけ、そこで子供たちが遊び、大人も交流ができる。必ずしもそこに住んでいる人たちだけじゃなく、通りすがった人ともいろいろな交流ができる。そういうところにまた様々な新しい連帯感が生まれ、文化的活動が生まれてくるのです。

日本は公共空間の利用頻度が世界で一番低く、公園の利用率も最低です。そういうことは私は大変に問題だと思いい、公共空間をもっと有効に文化活動の場として生かそうと申し上げているわけです。

四 新しい地域社会づくりと文化活動

文化を地域社会づくりの柱に

このように文化を育てていくことは、これからの地域社会づくりにどう位置づけられていくべきなのでしょう。か。

よく地方都市に何々銀座というものがありますが、すべての町が東京と〇〇都市のまねをして始めたら、本当

ある、もう少し広い言い方をすれば文化を育てることである、というように方向転換をすべきではないかと考えるのです。

文教政策の中でも教育と文化を比べると、教育委員会もそうでしょうが、全体に日本の文教行政は、どちらかというと文化行政よりは教育行政、しかも学校に力が入っていたわけです。それは私は当然なことであり、戦後三十数年の間に、そのことが日本の国に非常に大きな力をつけるものになったと思います。ただそれがそろそろ一段落し、新しい文教政策を考える時期に入ったのではないのでしょうか。

例えば非常に広い範囲で生涯教育を考えなければならぬ、というように教育という考え方が既に拡大解釈されつつありますが、それを別の面からみると、やはり教育というのも文化的な国づくり、地域社会づくりの一つの手段であり、基本はやはり文化をつくっていくということであるということに文教政策の柱が転換していく時代になってきたと思うのです。中教審で初めて文化を取り上げたというのも、歴史的に見て非常に象徴的な

ことだと思えます。

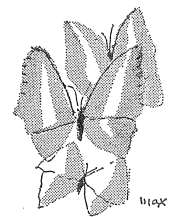
文化的な発想

そのように文化を育てていくためには、すべての発想を文化的にすることが重要だと思えます。文化というと、すぐオペラを見ることがなとか、絵を鑑賞することかなとか、スポーツを盛んにやることかなというように、非常に狭く考えがちですが、私の言っている文化的発想というのは、例えば一つの工場を誘致するにしても、その地域社会の文化が発展するように考えるというようなことなのです。地場産業や、その地域の伝統工芸とどのようにうまくやっていけるだろうかというふうに考えて工場を誘致すれば、これは非常に文化的発想の産業政策だと思えます。

それから、学校についても、例えば学校を開放してその地域での文化活動に使っていくのであれば、既に教育施設が文化活動の中心になる可能性があるということとで、これも文化的発想でしょう。あるいは、最近、文化のための一パーセント予算ということがよく言われます

が、文化というのは特別に何か絵を買うことなんだからそのための予算を一パーセント取らなきゃいけない、という考え方よりも、むしろ予算は今までどおりでも、より文化的な地域社会づくりのためには学校施設をどういうふうに配置し、どういうふうに設計したらいいかと考える方が、より文化的だと思うのです。

そういうふうに行政全般にわたって文化的発想を入れていくことが、実は文化を育てることなんだということを、最後に強調しておきたいと思えます。



教育委員会月報 第31卷 第3号 MEJ 63

著 作 権 者 文 部 省
発 行 者

印 刷 者 東京都港区西新橋3丁目6番10号
大日本法令印刷株式会社